

泡が知っていた

口演 茅々斎かちかち

い  
いまの世でも、母一人の子育ては容易ではありませんのに、昔むかしの時代は  
はどうであったのでしょうか。

ご  
ご大層な学者先生のなかには、女性の再婚は不道德であると決めつけた御仁も  
ございました。たとえば、北宋ほくそうの時代の程頤ていという大先生はこう言っておられま  
す。

「餓死するは、事は極めて小にして、節せつを失うは、事は極めて大なり」。

いくらわかりやすく言い直しますと、

「正しくないことをするくらいなら飢え死にした方がましだ」。

こう言つて、節義のために大先生御自身が餓死なさるのなら、まことに結構で  
ありましようが、夫をなくした女性に、夫の両親の面倒をみつつつ子を育て、夫の

家の再興に尽さなければいけない、いくら生活が苦しいからといって、他所の家に嫁ごうなどと考えるはならないと説いたのでございます。

こうした大先生のお言葉に感悟してかどうか、実際にそのようにした女性も確かにいました、烈女、れつじょ孝女としてはなはだ顕彰されたのでありますが、ここで少しご安心いただきたいのは、いろいろな先生方がやかましいことをおっしゃっていても、子を連れての再婚は宋の時代には格別珍しいことではなかったのです。あります。

だいちゆうしやうか 大中祥符七（一〇二四）年のことでもあります。ある女性が、とうぶんこ登聞鼓を叩いてお上に直訴しました。登聞鼓と申しますのは、宮城の門に設置された太鼓で、民が非道に苦しむときに、これを鳴らして皇帝に訴えてよいとされたものであります。

このときの訴えは、

「夫が一切の財産を持ち逃げしてしまいました。これでは暮らしが成り立たず、飢え死にするよりありません。どうか新しい夫を持つのをお許しください」。

当時の法規では、夫が行方知れずとなったときには、六年を待つて再婚を許すということでした。無一文でどうやって六年を生きたらいいのかとの女性の訴えによつて法は改められ、不届きにも夫が財産を持つて蒸発した場合には、すぐに再婚してもよいとなりました。

夫が死んだ場合の再婚は、きちんと喪に服した後であればよしとされていて、死後二十七日か月間を過ぎてからとなっていました。これでは長すぎるといふ女性の訴えによつて百日間に短縮されました。現在の日本の法律は再婚禁止期間を六カ月間としていますから、それよりも短かったのです。

「再婚するとき相手をどのように選ぶのか、まことにおもしろいことに、本人

の意思で決めてよいとされました。結婚するときには、もちろん親やら親類やらいろいろな人の意向によって決められて、本人の意思など入る余地はまずなかったのがありますが、再婚となるとまるで事情が違ったのであります。

大変よく知られた事例がございます。一人の女性の再婚を巡って二人の大臣が争ったということがありました。

宋の初代皇帝と二代皇帝に仕え、副宰相、宰相を十八年の長きにわたって務めた薛居正せつきよせいという人がいました。この人の奥様には子がなかったので、惟吉ゆいきつという者を養子にしました。旧い中国では跡継ぎを儲けることが極めて重要でありましたから、奥様に子が生まれなければ普通は妾を持つのでありますが、こちらの奥様は夫に貞節を求めることでは当代随一でありましたので、妾などともないということでは養子をとるよりなかったのです。この惟吉はまことのどら息子で

ありまして、親の七光りでお役人様にはなったものの、ろくに仕事はしないで遊んでばかり、父親が死にますと、これ幸いと遺産でひたすら遊びまくる始末で、それがたたって体を壊し、四十二歳で他界し、柴氏さいという若くて美しい妻が残されました。柴氏のもとには薛居正以来の莫大な財産がありましたので、それを持って誰と再婚するのか世間は大変な関心を寄せたのでございます。

柴氏の心を射止めましたのは、張斉賢ちようせいけんという大臣でありました。このとき張斉賢は五十八歳だったといひます。いい年をして美貌と財産に目が眩んだのかと、怒ったか悔しがったか、横槍を入れましたのが、向敏中しやうびんちゆうという大臣でございひます。

死んだ薛惟吉には安上あんじやうという、父を上回る不肖の息子がいました。柴氏の子ではなく、先妻の子でありました。安上は、自分に分け与えられた財産はすでに使い切ってしまったていて、義理の母の柴氏の持ち分を狙っていたのですが、張斉賢

と再婚されたのではあてがはずれてしまうと、再婚を阻止すべく、柴氏と張斉賢の間にはなはだ不道德なことがあると訴え出たのであります。

大臣が関わるまことに外聞のよろしくないこの訴訟事を、皇帝は不問に付そうとしました。ところが、向敏中がやおら乗り出してきました、薛安上の肩を持つたのであります。

そうなりましては、皇帝も知らん顔ができず、柴氏を呼んで、張斉賢との間に何があったのか問いただしますと、柴氏は嫌疑を否定した上で、

柴「実は、私めは、先に向敏中様から求婚されまして、それをお断りしたのでございませう。それを遺恨に思われて、このようなことになったのでありませう」。

皇帝は、向敏中が先ごろ妻をなくしていたのを知っておりましたから、疑わしく思い、今度は向敏中を呼んで問いただしました。

向「確かに、私は妻と死別しましたが、いまだかつて再婚を考えたことなどはございませぬ」。

皇帝の前で真つ向から否定したのでございます。信頼する大臣の言葉ですから、皇帝は逆に柴氏を疑うようになりました。

ここで張斉賢の息子の宗誨そうけいがこっそり柴氏に入れ知恵をしました。

柴氏は、向敏中の身边を調べるよう強く主張しました。すると、向敏中は、王おう承衍しょうえんの妹を後妻に迎える話を進めつつあることが明らかとなり、皇帝に対して嘘を言ったことがばれてしまいました。その上、向敏中と薛安上の間には不適切な関係があることまでも知れて、皇帝は激怒したのであります。

向敏中は以前から薛安上と親しく、金に困った薛安上のために、その屋敷を質にして金を貸し、薛安上は、柴氏の財産を手にしたら、貸した金に利子を付けて



返すと約束していたのです。しかしながら、その屋敷は、祖父の薛居正の功績によつて特別にお上から授けられていたもので、質に入れたり、売ったりすることはかたく禁じられていたのであります。

かくて向敏中は地方に飛ばされ、柴氏は目出度く自分の思いを通して、張齊賢の妻になったのでした。

**今**日のお話は、そのようなお歴々のごたごたではありませんで、庶民の再婚を巡る物語でございます。例によつて王震屈先生おうしんくつが一人静かに書見をしているところから始めるといたしましょう。

「先生、おられますか」。

返事がないうちに、勝手に開けて顔を見せましたのは、おなじみ劉婆りゅうばあさんでございます。

劉「おや、ちようどよかった。こんな按配の天気ですから、おられると思つては  
いしましたが」。

王「今日は朝から雨が降つたり止んだり。そうでなくとも、どこいく用とてない  
身。子供たちが帰つてしまえば、こんなことをしているだけだ」。

書物を脇にやつて、招き入れます。

劉「これで雨の多い時分ですから、仕方がないのでしょうけれど、晴れたと思つた  
らまたすぐに降る。実にいやな天気です。いまも、いつまた降り出すかわかつた  
ものでない。この雨の止み間に、ちよつとご相談がありました」。

王「相談かい、そなたが持ち込んでくるのは、どうもろくなことにならない」。

劉「いけないことなどありましたか」。

王「いけないことだらけだ。ついこの間の一件だって、ひどいものだった」。

先生、顔をしかめてみせたものの、書見にも飽きていたところで、

王「ともあれ、もうきてしまったのだから、少しゆっくりしていきなさい。茶の一杯くらいはご馳走するでしょう」。

劉「お茶でございますか。いつもあいすみません。お茶を頂戴するためにきたのではないのですが」。

王「ちようど飲みたいと思っていた。遠慮はいらぬ」。

のっそり土間へと立ちますと、

劉「湯なら、あたしが。せめてそれくらいはしませんと」。

王「いや、私ができる。そなたはどうもがさつでいかん。ぐらぐら煮立てればいい

というものではない。なかなか玄妙な火の加減があるのだ。

劉「どうせあたしはがさつ者ですとも。先生はときどき妙なところにこだわりがありますから、お湯のほうはお任せします。それで、ついこの間の一件っておっしゃったのは、何のことでしたか」。

王「まさかもうお忘れかい。あれは王木おうぼくとかいわなかつたかい」。

劉「はあ、はあ、王木ですか。あの一件では、とんだご迷惑をおかけしました。

でも、あれは先生のご親類なのでございましょう」。

王「違う、違う。あんな者が親類のはずがない。そなたがそんないい加減なことを言つて、話を持ち込んできただけだ」。

劉「ご商売が同じでしょう」。

王「商売というのも妙だ。たまたま学問を教えて口に糊しているところが同じだ

ただただだ。私のほうは、あれやこれやあった上でこのようになっていたので、王木のほうはれっきとした代々の学者だ。私と同じにされては、むしろ王木としては不本意であろう。が、それでもああもだらしなくなるのだから、学問というものも、案外と頼りにならないようだ」。

劉「学問を修めれば立派な人間になれると、お弟子さんに向かって常日頃おっしゃっていますのに、ご自分の商売道具をけなしてどうなさるのですか。お弟子さんが減りますよ」。

王「学問が商売道具かい。まあ、私などはそのように言われても仕方あるまいか。王木のほうは、天下のために身を役立てようと真面目に学問に励んでいたはずだ。だから、心を入れ替えて勉強せよと、お上から厳しくお叱りを受けたのは、当然といえば当然であったし、お叱りだけすんだのはまことに幸運であった。代々の

学者だったからだろう。そうでなかったら、王木は罰せられて、そなたに頼まれて王木を助けてやろうとした私まで、とんだとばっちりを食らいかねないところだった」。

劉「あたしだって、最初からあそこまでだらしない人だとは知りませんでした。

阿連あれんさんのことを人づてに頼まれて、阿連さんに会ってみたら、なかなかよさそうな女の人ではありませんか。つい首を突っ込んでしまったのです。ああも話が入り組んでいるとは思いませんでした」。

王「それもごく下世話の詰まらない話だ。一人の女に、男が三人も四人もからんで、殴ったり、蹴ったり、汚物をかけたり、みつともないったらない。阿連さんというのは、よほど男の気を強く引く魅力みたいなものがあつたのかい」。

劉「どうなのでしょう。女のあたしから見たら、普通にまあまあ感じのいい人と

いうだけで、特別なところはないのですけど。殿方にとっては格別なところがたぶんあるのでしょうか。

王「あれから、阿連さんはどこかにちゃんと片付いたのかい」。

劉「ええ、お上がそうせよとおっしゃいましたし、それこそあたしの商売ですから、阿連さんの気に入る人を見つけて、嫁入りさせてやりました。都の近くでは、またひよつとしてごたごたが再燃してもいけませんから、田舎のほうに送り出しました。さすがに阿連さんも懲りたでしょうから、もう何も起こさないと思います」。

王「そうならいいのだが。人の本性はそうそう変わるものではない。阿連さんは懲りたとしてもだ、まわりの男どもはどうなのだ。田舎のほうにまで追いかけていったりしていないかい。世の中、男と女の間ほどわからないものはない」。

劉「先生は、そう言いながらも、事があるのを望んでおられるではありませんか。案外と揉め事が好きなのですから。違いますか」。

王「孔子様も『吾未だ徳を好むこと、色を好むが如くする者を見ざるなり』とおっしゃった。常人はどうしたって徳よりも色だ。私なんぞは孔子様には遥かに遠いだから、俗っぽいことに首を突っ込みたくなつたって仕方あるまい」。

**阿連**の事件と申しますのは、今日の本筋とは関係がないのですが、再婚にまつわる当時の社会の様子を窺い知ることができますので、ついでにお話しておきましょう。

阿連は伝十九でんじゅうくという男の妻でありました。夫は商売の関係で家を留守にするこ



とが多く、その間を狙って、阿連は別の男といけない関係を持っておりました。しかも相手が複数であったために、やっかいなことになったのでした。

一人を陳憲ちんけんと申します。陳憲は幼いころに父が死に、母は劉というお役人と再婚しました。陳憲は義父と同じように自分もお役人になるつもりで勉強していたのですが、本気で阿連に惚れてしまいまして、いずれは伝十九と別れさせて、自分の妻にしようとまで思い詰めておりました。何せ伝十九はしがらない商人ですから、役人になるはずの自分のほうを阿連は選ぶに違いないと、陳憲は自信を持っていました。

阿連から、亭主が出かけて当分は帰ってこないとの報せを受けまして、陳憲はいそいそと出かけていきました。しかし、どうした手違いがあったものか、その日、阿連には先客がおりました。それが王木でした。

二人のみそか男が鉢合わせをしまして、怒ったのは陳憲、震え上がったのは王木でありました。陳憲は若くて血気盛ん、王木は年輩の生真面目な学者先生であります。王木先生、さんざんに殴る蹴るの乱暴をされ、その悲鳴が近所にも聞こえるという騒ぎ。

その後で商売から帰ってきた亭主はこの一件を聞き知って真赤になって怒りまして、ぼこぼこにされた学者先生はもう罰せられたからよしとして、陳憲のところに談判にいきました。非は陳憲の方にもありますが、義父がお役人でもありますから、居丈高に振る舞い、ついには伝十九に対しても殴る蹴るの乱暴を働いたのであります。

伝十九は悔しくてならず、阿連もそんな陳憲が怖くなりましたので、お上に訴えて、陳憲にお仕置きを加えてもらおうということになりました。そこで訴訟事

に馴れている劉婆さんが阿連を助けることになり、王先生も一枚噛んで、訴訟に必要な書類を書いてやったのでした。訴訟事というのは、真正直にやりますと、庶民はえてして下端役人の食い物にされてしまいますので、王先生は助力してやるのが時々あるのです。このとき阿連は二人の男が浮気相手であることは隠して、伝十九と王木が怪我をさせられた暴行事件を訴えたのです。

お上の取り調べが始まりますと、気の弱い王木は、阿連との関係を自分の口からしゃべってしまいました。陳憲の義父が裏から手を回したこともあって、阿連がとんでもない尻軽女だというところに焦点が当てられて、阿連は亭主と離縁させて都から追放というお裁きが下ったのでした。陳憲には何のおとがめもなしで、それで一件落着とは筋違いな感じもしますが、当時のお裁きはそのようなものであったのでしょうか。

しばらくしてほどぼりが冷めますと、夫の伝十九は、お上の禁を破って阿連を都に連れ帰りまして、再び夫婦として暮らしたのでありますが、そればかりでなく、王木とのよりまでもとに戻ったのであります。

それを知った陳憲は腹を立てまして、阿連が外出するのを道で待ち伏せして、さすがに殴るのはもうまずいと思って、さんざんに罵声を浴びせたのでございます。陳憲というのはいまの世のストーカーでありましょうか、それからは執拗に嫌がらせを繰り返したのでございます。

阿連はほとんど困りまして、息子の伝廿六と王木に仕返しを頼みました。二人は、またぞろ出てきた陳憲に後ろから樽いっぱい汚物をぶっかけたのです。糞尿まみれで苦しむ陳憲を伝廿六がさんざんに打ちつけました。実に臭い喧嘩があつたものです。

陳憲はここは辛抱して手を出しませんで、王木と伝廿六をお上に訴え出ました。

二人に非があるのは明らかでありましたが、王木は代々の学者だということからお叱りを受けるだけですみまして、伝廿六はただの庶民でありましたから、お役人の子の陳憲を殴った罪で八十回の棒叩きとなりました。

それよりもつと気の毒な人がいまして、それは、この糞尿事件が起こった現場の近くに住む張八九でした。陳憲が乱暴されるのを傍観し、周りの者を呼んで助けなかった罪で、十二回の棒叩きとなりました。とんだとばっちりがあったものですな。

そして阿連はと申しました、そもそも夫の伝十九がだらしないからこのようになったのだ、もっとまともな男を選んで再婚するようにときつく申しつけられたのであります。

少しばかり話が長くなりましたが、その間に釜から湯気が立ち昇り始めましたので、

王「そろそろいい具合であろう。そなたも見るがいい。湯のわかし加減を教えてくださいんぜよう」。

劉婆さんは首を伸ばし、

劉「まあ小さな泡が一面にふつふつと立ってきていますこと。ひよつとしてこれのことですか、蟹眼かいがんとか申しますのは」。

王「ほう、そんなことも知っているのか。これは感心だ」。

劉「あたしだってたまには立派なおうちでお茶を頂戴することだってあるので」。

ございます。蟹の眼のように泡が立ってきたとか、そんなふうにいうのを耳にしますのすので」。

王「そうか、立派なおうちでか。こんな小汚いところに住んでいながら、茶なんぞを飲むのは不釣り合いだとは、私もよくよくわかっておる。茶をやめればこの暮らし向きも楽になるとは思っても、唯一これが昔から続く贅沢で、こればかりはやめられないのだ」。

劉「先生のお茶は、立派なおうちでいただくのよりも結構だと、いつも感心しています」。

王「結構かどうかは知らぬが、私の茶はごく昔流だ。最近のとは味も随分と違うだろう」。

王先生は泡の加減を見て一人うなずきますと、ごく少量の塩を入れます。泡の

様子がわずかに変わったところで、水を少し注ぎながら竹の細い棒でかきまわし、その渦の中心に茶を轆いた粉を投入します。なおも泡の状態を注意深く見守りつつ、頃合いをみて水を加えて沸騰を止めます。そして釜を火から遠ざけます。

ずっと見ていた劉婆さんはやおら両手を口に当て、

劉「ううん」。

と、うなつてのけぞります。

王「どうした。気分でも悪くなったかい」。

劉「くらくらと目まいがしまして。ああ、やっぱり止めておけばよかったです。あたしも迷ったのです。でも。ああ、いけない」。

今度は頭を抱え込んでしまいます。

王「何かまずいことがあったのかい」。



劉「まずいことなりそうだとは思ったのです。それで、こちらにご相談と思つて伺つたのですけど、こうしている間に、もう手遅れになつてしまつたような気がしてきました。軽はずみにあたしが言つたために」。

がつくりと肩を落とします。

王「何だか知らぬが、せつかくわかつたのだ、ともあれ一杯飲んで気を落ちつかせたらどうかい。それで、やはり相談というのなら、聞かせもらおうではないか」。

先生は柄杓で汲み上げて碗に入れて差し出します。

劉婆さんは茶をすすりつつ考えて、

劉「あたしつて、口数が多すぎますか」。

その真剣な顔に、先生は思わず微笑み、

王「ほう、いまごろ気付いたのかい」。

劉「ついつい余計なことまで言ってしまう。これも生まれながらの性分で、いまさらどうすることもできないのでしよう。あたしのこの口がいけないのです」。

王「その口で何を言ったのか」。

劉「人にはどうしても秘密にしておかなければならないということがありますでしよう。それって、聞いてみたくなるのが人情でございましょう。あたしは、おかみさんにお教えしてしまつたのです。『あのころと比べましたら、いまは夢のように幸せです』って言ってみたらどうでしょうかって。それをおかみさんがもう言ってしまったら。秘密は秘密のままのほうがよかつたと後でわかつても元には戻せませんでしよう」。

王「どうも話がさっぱりわからない。おかみさんというのは、どこのおかみさんなのかい。少し順序立てては聞かせてもらおうではないか」。

王先生は、空になった碗にまた汲んでやりませう。

劉「朱しゅのおかみさんなのです。先生は覚えておられますか、もう四、五年になりませうか、あたしが間に入って、呂りょさんとの再婚をまとめたおかみさんです」。

王「それだったら、覚えているも何もないものだ、朱さんのところの倅こさんはうちの生徒で、ついさつきまで、ほらあのあたりに座って字を書いていた」。

劉「ああ、そうでした、そうでした。上のお坊ちゃんお坊ちゃんは、この春からでしたっけ」。

王「八歳になったのを機に、ここに寄越すようになったのだ。朱さんは商人のおかみさんにしては感心な人で、きちんと読み書きができて、たとえ上手でなくても詩くらいも作れて、どこに出ても恥をかくことのないよう、厳しくし躱くけてくれと連れてきた」。

劉「あのおかみさんは本当にしっかりした人です。それに、とてもきれいで。先

生もそう思いますでしょう」。

王「どこの誰と人に知られるような家に生まれていれば、大臣宰相の妻になつていてもおかしくあるまいな。あの子は、前のご亭主の子なのだろう」。

劉「そうです。いまのご亭主の呂さんとの間には女の子がいます、まだ二つくらいでしょうか」。

王「呂さんも、朱さんのご亭主にふさわしく、折り目正しいなかなかの人だ。商売柄、長く都を留守にすることもあるようだけれど、ここところは、倅さんを連れてきたり、迎えにきたりで、ときどき顔を見せている。いつも丁寧に挨拶されて、やはり、厳しく躰けてほしいと言われる。呂さんもなかなかの男前だし、まさに似合いの夫婦だ。そなたもいい縁結びをしたものだ」。

劉「ここで、えへんと、威張つて胸を張りたいところですが、あたしがお二人を

結び付けたのではなくて、実は、亡くなったお義母様かあさまに頼まれて、段取りを整えてさしあげただけなのです」。

王「お義母様というのは、前の亭主のお母さんかい」。

劉「あの方もやつぱりきちんとしたお方でした。あたしもですからきちんと世話をしてさしあげまして、それで夫婦ができあがりますと、本当に仲がよろしくて、お義母様も大喜びで、いigo縁の取り結びをしたと、あたしは自慢に思っていたのです。そうした縁を大切に、変に考えるのはおよしなさいと、あたしは申し上げたのです。あたしだって、何も最初から変なことを言ったのではないのです。でも、ついこの口が」。

と、また手でおさえます。

王「話が飛んでわからなくなつた。そもそも何が問題なのかい」。

先生はまた茶を汲みます。それを受け取って、

劉「どうもあいすみません。お茶のお礼も言わずに戴いてしゃべるばかりで。このわずかな塩の効き方が、先生のお茶のお味です。爽やかさが引き立ちます」。

王「とってつけたように寝めなくていい。冷めてしまおうと格段に落ちるので、せいぜいあと一碗で終わりだ」。

劉「問題といますのは、ご亭主です。ご亭主のそぶりが妙だというのが始まりです」。

王「ほう、呂さんがかい。一昨日だかもこられたけれど、何も変わったようなところはなかったように思うが。まさか阿連と伝十九の夫婦のようなことではあるまい」。

劉「それが泡なのです」。

王「泡。何の泡かい。蟹眼ではあるまいな」。

先生は最後の茶を汲みます。

劉「ですから、近頃は、いままた降ってきましたけれど、こうして雨が多いでしょう。雨が降ると地面に水が溜まりましょう。そして、雨がやんで、日が射すと、水が乾いて、水溜りが浅く小さくなりましょう」。

王「当たり前だな」。

劉「水溜りがすっかり消えてしまう前に、どうかすると、ぶつぶつと泡が立つようないくつかありませんか」。

王「まあ、あるだろうな」。

劉「ひと月ばかり前が最初だったとおっしゃっていました。雨が上がってしばらくしたところに、ご亭主がぽつんと庭先に立っていたのだそうです。おかみさんが

声をかけようとして、ちよつといつもと感じが違つて、これつて妻の直感なのでございましょう、はつとして、声を出さずに離れたところからそつと見ていたのだそうです。ご亭主はおかみさんに見られているとは知らずに、うなだれてじつと水溜りに目を注いでいたのだそうです。蛙とか虫とか何かがそこにいるわけではなくて、ただ水が溜っているだけでした。何をしているのだろうか、おかみさんは息をこらして見ていますと、ご亭主が不意に、『ふふふ』と、聞こえるか聞こえないか、ごく小さく笑いを漏らしたのだそうです。それはこれまで聞いたことのない、何とも気味の悪い笑いだったそうです。笑いはその一度だけで、しばらくすると、呂さんはふつと我に返つたようにそこから離れまして、その後は普段と何も変わりなくされていましたから、おかみさんもそれ以上は深く気にもとめずに、その日はそれで終わったのです。ところが、また幾日かして、雨が上が



ってしばらくしたところに、同じようなことがあったのだそうです。『ふふふっ』というご亭主の声に、おかみさんは、ぞつと冷たいものを感じまして、それから気がなつて仕方なく、ご亭主の様子を知られぬように観察していますと、決まつて雨上がりと同じことを繰り返して、水溜りに泡がふちふちと出てきたときに、『ふふふっ』と笑うのだそうです。水が干上がつて泡が消えると、ほつと安心したかのように立ち去るのです。それを何回も見たら、何をしているのだろうと、誰だつて気になりますでしょう。おかみさんは尋ねたいと思うのですが、ぞつとするあの笑いに、訊いてはいけない気がして、それで訊けずにいるとますます気になって、もう気が変になるくらいなつてしまふのだそうです。

王「心にこびりついて離れないのだろう。きちんとした人というのは、いい加減にできなくて、どうもそういうところがあるらしい。で、おかみさんが訊いては

いけないと感じるのに、何かしら心当たりがあったりするのかい。呂さんがいくらもの堅い人だといっても、商売柄、旅に出て、他所の土地で浮ついた話がないとも限らないだろう」。

劉「あたしもそれを疑って、ちよつと訊いてみたのです。そしたら、おかみさんは大したものです、『そんなことではないのです。たとえ他所で何かあっても、それは亭主の働きですから、構わないのです。決してとやかく言ったりするものはありません』と、きっぱりおっしゃいました」。

王「口でそのように言っても、本心がそうだとはいえぬだろう」。

劉「おかみさんはあたしの前でしばらく逡巡したあげくに、一人ではもう我慢できなくなっていたのでしよう、すべてを打ち明けてくださいました。あたしのところにながざわがざわられたくらいですから、話すつもりでいたのだとは思いますが、

おかみさんはそれで『先の亭主のことがいまさらながら思われて』とおっしゃいましたので、これはあの件かとすぐにあたしは感じました」。

劉婆さんは一人得心したようにうなずきます。

王「先の亭主というのは、たしか任じんさんといっただろう」。

劉「先生、よく御存知で」。

王「朱さんが倅さんを連れてきた最初のとくに、『この子はいまは夫の子として夫と同じ呂姓を名乗らせておりますが、将来この子が自分の力で家を興すまでになりましたら、もとの任姓を名乗らせたいと思っています。夫もそのことは承知しております、そうなるためにも、学問をさせたいのです』と言っておられた。朱さんだけでなく、呂さんもそれと同じことを言うので、いつも感心しているのだ」。

劉「どこまでも立派なご夫婦ですこと」。

王「任さんが亡くなったのはいつのことだい」。

劉「息子さんが生まれて間もなくですから、六年か七年前でしょう」。

王「どういう亡くなり方だったのかい」。

劉「商いの旅に出ている、事故に遭ったのだそうです」。

王「任さんもやはり商売人だったのかい」。

劉「ええ、呂さんのあのお店は、もともとは任さんのお店だったのですから」。

王「おかみさんと一緒になって、呂さんが店を継いだのか」。

劉「いえいえ、そういうことではないのです。順を追って話しますと」。

王「最初からそうしてくれていたらよかったのに」。

劉「すみませんね。口から出ていくままにしゃべってしまう性分なので。それで、

最初の最初から言いますと、任さんと呂さんは、もともとどこか田舎の同じ村に住んでいたのだそうです。十歳だか十五歳だか任さんの方が年が上で、任さんが二十歳のころだかにお父さんが亡くなってお母さんと二人になったのを機に、思い切って都に出てきたのだそうです。それからは大変なご苦労があつて、十年余りで一人立ちしてご自分のお店を持つまでになったのです。そのころに、呂さんが都に出てきて、同郷だというので、任さんのお店で働くようになったのだそうです。普通なら、主人と奉公人という関係なのでしょうけれども、任さんという人が大変よくできた方で、同じ村から出てきて主従ということもないだろう、兄弟同様ということにしようと、それこそ本当の兄弟以上に仲良く力を合せて店を大きくしていったのだそうです。一人とも働き者で、実直な人でございましょう、信用第一でどんどん繁昌しまして、ここにまでなればお嫁さんを迎えてお母様を

安心させられると任さんは考えまして、それで朱のおかみさんがこられたのです。

王「そのとき任さんは幾つぐらいだったのかい」。

劉「四十歳にもなっておられたでしょうか」。

王「朱さんは幾つだったのかい。いまだって、随分と若く見えるが」。

劉「二十歳前後というところだったでしょうか」。

王「呂さんは三十になるかならいかつてところだったのだろう。ならば何かあつてもおかしくないか」。

劉「先生、急ぎすぎです。いきなり疑つてはいけません。もの堅いきちんとした人ばかりですから、何もありません。夫婦仲は大変よろしくて、おかみさんは亭主によく尽しただけでなく、お義母様にもよく尽くしまして、申し分のないお嫁さんでした。店の手伝いだつてみごとになさつていたそうです。一、二年

して男の子が生まれ、その後で、大きな儲け口があるというので、任さんと呂さんが二人して旅に出て、それで不幸な事故に遭ってしまったのです」。

王「二人はいつも一緒に旅に出ていたのかい」。

劉「兄弟同様ですから、一緒のことも多かったそうで、片方が出て片方が留守番ということもあつたそうです。朱のおかみさんがきてからは、呂さんだけが外に出ていくということが続いていたようですが、そのときは格別大きな商いなので二人でいったのだそうです」。

王「事故というのは、どのようなことだったのかい」。

劉「船でございます。大きな川のとある崖下に船を繋いで夜の明けるのを待っていますと、ほんのり白みかかったところに、突然のこと、崖の上からものすごい風が吹き下ろしてきたのだそうです。船はそれを食らって、いきなりひっくりかえ

ってしまいました、あまりに不意だったものですから、船の上の者は眠っていたまま一人残らず水に放り出されたのだそうです。夢の続きとも現実とも区別がつかない状態で、人々は水の中でもがきまわして、木切れやら荷物やらにつかまって、多くの人が流されながらも、どうにかこうにか助かったのですが、任さんは泳ぎを知りませんで、不運にも手近に何もつかまるものがなかったのでしょうか、どんどん流されてしまいました、随分と下流で、冷たいむくろとなって見つかったのです。もう商売どころではありませんで、呂さんは、携えていた金品をすべて使って、任さんのなきがらを棺におさめて都へと持ち帰ったのです」。

王「その死骸は調べたのかい」。

劉「いまこうして話しますと、呂さんが怪しいように聞こえるかもしれませんが、当時は何の疑いもなかったのです。任さんと呂さんは本当の兄弟以上に仲よしで



ありましたし、呂さんはあのように誠実な人柄で、帰ってきてからの振る舞いだけって実にみごとなものだったのです。葬儀一切をきちんとすませますと、詳細に記した帳面をお義母様と朱のおかみさんの前に差し出して、お店にこれまでどれだけの出入りがあって、いま残っているものがどれだけあってと、事細かに報告して、いまあるものをすべて処分してお店を閉じるといくらぐらい手元に残って、贅沢さえしなければ、息子さんが成人するまでの間、三人で十分に暮らしていけるといったことを話しまして、それで呂さんは暇乞いをしたのだそうです。呂さんは、自分は一銭もいらぬ、一からまた商売を始めますと言ったのだそうです。王「ふうむ。いまの呂さんを見ても、呂さんらしいけじめのつけ方だな」。

劉「呂さんはすぐに身を翻して出ていこうとしましたので、お義母様が慌てて止めて、『倅がここまで大きくした店がなくなってしまうのは残念だ、倅だけではな

くて、二人で大きくしてきた店ではないか。ずっと一緒にやってきたのだから、急に出ていくなどと不人情なことを言わずに、このままここで商売を続けてくれないか』と頼んだのだそうです。

王「お義母さんとしては自然な気持ちなのだろうな」。

劉「呂さんは、『ここは旦那さんのお店です、自分が残ったら、旦那さんのものを取ってしまうようで、気持ちが悪やかではありません、自分は無一文から始めます』と、あくまでも出ていこうとしまして、お義母様は『旦那とか水臭いことを言わないでほしい、倅が弟だと思って一緒にやってきたのだから、そなたは私にとつては倅のようなものだ、決して出ていってくれないな』と止めまして、呂さんとお義母様の間でそのようなやりとりが延々と繰り返されまして、お義母様が泣いてすがってとうとう根負けというのでしようか、呂さんもついに折れて、『しば

らくの間、店を続けさせていただきます、もしも少しでも気に入らないことがあつたら、すぐに遠慮なく追い出してください』と言って、一応の決着を見たのでした。呂さんは店とは別に住まいを他所に借りまして、そこから通つてきて、一日の終わりにはお義母様に帳簿を見せて、今日は何をどれだけ商つたというようなことをきちんと報告して帰るということで、商売を続けたのです。お義母様に對しても、息子以上に尽くして、申し分のないことこれ以上はありませんでした。そして、月の終わりには、『もし何か気に入らないことがあれば追い出してください』と必ず言っていたそうです。

王「なかなかできることではないな。で、朱のおかみさんとはどうだったのかい。」  
劉「任さんが亡くなってからというもの、呂さんと朱のおかみさんが口をきくようなことはほとんどなかったらしいです。おかみさんはいつもお義母様とご一緒

で、ご亭主の喪に服して、ごくごく慎ましやかにお過しでした。それから二年ばかりもしまして、月の終わりの報告のときに、お義母様は、『自分も年だし、先のことを考えると、いつまでもこのままではいけない、もしもそなたがうちの嫁をもらってくれたら、万事がすべてうまくおさまると思うのだが、そうしてはくれないかい』と言ったのだそうです」。

王「それで、夫婦になったのか」。

劉「そう単純ではありませんでした。呂さんは『いまでこそお店を任されてはいませんが、もとをいえば私は旦那さんの下僕でござりました。下僕が旦那さんの奥様と一緒にいるなど許されることはありません』と断ったのです」。

王「そうか、やかましくいえば、主僕の間に通婚は禁じられているからな。もの堅い呂さんなら言いそうなことだ」。

劉「お義母様は『そなたを下僕と思ったことは一度もない、死んだ倅も嫌っていた、倅とそなたは兄弟同然だった、そなたは私の息子と喋っていい、ここは母の言うことをきいて、どうしても一緒になつてもらいたい』と、お義母様は強引に説得しようとしたそうです。しかし、呂さんは断り続けて、お二人の意地の張り合いみたいになつてしまつたのです」。

王「呂さんがあくまでも断つたのには、ひよつとして、そのとき呂さんには他にいい人でもいたのかい」。

劉「いいえ、呂さんはまことにもの堅い人で、色恋沙汰などは一切ありませんでした。これは断言できるのでございます」。

王「ほう、大層、自信ありげだな」。

劉「ええ、だつてあたしが念入りに調べたのですから。呂さんがあまりに頑なだ

ったでしょう、それでお義母様に頼まれて、あたしがあれこれ働くことになったのです。色恋沙汰であれ、呂さんに何かどうしても断らなければならぬ理由があるのなら仕方ないと、探ってみたのですが何もありませんでした。お義母様といろいろ相談して、お店ばかりか奥様までも自分のものにしては亡くなった任さんに申し訳ないということが一番のひっかかりだろうから、ここは搦め手から攻めてみましょうということになりました。女が再婚するときは自分で相手を決めていいということになっています。それで朱のおかみさんが望んでいるということ、呂さんを口説き落とそうということ考えたのです。まずあたしが朱のおかみさんに気持ちを聞いてみますと、もの堅い人というのは簡単ではありませんで、『はい』という返事をもらうまで、随分と大変でした。『先のご亭主の喪だつてとづくに明けているのですから、いつまでも義理立てしなくても

いいではありませんか』とか、『息子さんをこれから先もずっと一人で育てていくおつもりですか』とか、『お義母様への孝行ですから』とか、いろいろなことを言っています、結局はその親孝行ということでのついに納得してくださいました。それで呂さんに話をもつていって、それからもまだいろいろありましたけれど、あたしも頼まれた意地がありますから、相当に頑張つて、とうとう観念してくれました。そこから後は、しかるべき人を間に立てて、もの堅い皆様が十分に満足するようきちんとした段取りを踏んで、一対の夫婦にしてさしあげました。それで一緒になつてみたらどうでしょう、渋つたり断つたり意地の張り合いみたいことをしていたのがまるで嘘のような仲のよい夫婦になつたではありませんか。嬉しくはありましたけれど、四の五の言わずにさっさと一緒になればよかつたのにと、何だか馬鹿馬鹿しいくらいに思つたものです」。

王「だが、最初からすんなりおさまっていたら、そなたに話がまわってくることはなかったのだろう。いろいろあったおかげで稼げたのではないのかい」。

劉「縁組みが成就すれば、それはもちろんそれなりのものは頂戴しますとも」。

王「結構な一对の夫婦ができあがって、子も生まれて、いまになって先の亭主のことが気になるというのはどういうことなのだ。仲がよいだけに、亡くなった先の亭主にすまないという気があって、妙なことを思ったりするのだろうか」。

劉「あたしもおかみさんに言ったのです。『気の回しすぎではないでしょうか。しばらくそっとしておいたら、そのうち、何事もなくすんでしまうのではないですか』と。しかし、もの堅い人というのはどうも困ったものです、あたしがそうやってなだめようとするのを、話をうやむやにしようとしているとお感じになったのでしょうか、だんだんとむきになって、『何としてでも訊かずにはいられません』



と、それも大層な剣幕でおっしゃるのです」。

王「それはきつと、前の亭主が亡くなった事故がからんでいるのではないかと、おかみさんも思うところがあつて、特別に気が猛たりするのではないのかい」。

劉「そのことはこれまでは一度だつて疑いの生じたことなんかありません。それでも、疑い出すと何かありそうな気がしてくる、やはり気持ちのありようなのです」。

王「しかし、人というのはわからぬものだ。むきになるのは、ひよつとして、おかみさんのほうにも何かがあるのではないのかい」。

劉「どういうことですか」。

王「以前から何かあつたとか」。

劉婆さん、ここで、小さく、

劉「ううん」。

と、うなります。

王「どうした」。

劉「あのおかみさんに限ってそのようなことはないと思っただけですから、あたしは方便としてどうかと思っておかみさんに言ってしまったのです。でももしも事実だとしたら、かなり具合の悪いことに。ああ、ますます心配になってきました」。

王「何をおかみさんに言ったのかい」。

劉「おかみさんがあんまりの剣幕で、これはまずいと感じて、あたしは一生懸命に止めたのです。いまはお義母様も亡くなっていて、御夫婦の間で何かあったら、おさめる人がいません。お堅い人同士というのは、ぶつかったらどうにもなりません」。

せんでしよう」。

王「そうであらうかな」。

劉「止めたのは逆効果で、ますますおかみさんはいきり立ってしまつて、それであたしは言ったのです。『でしたら、あたしから訊いてみましようか』と」。

王「ほう、それはいいことを言った。そなたが間に入って、うまく収めようというのだろうか」。

劉「とにかく波風を立たせないようにしたいと思つたのです。しかし、おかみさんは『これは夫婦の間の重大事です。自分から訊きます。とやかく間に入つてもraithくありません』ときつくおっしゃつてあたしに任せようとはしないのです。だつたら、あたしなどは用がないので、初めから話を持ってこなければいいのにと、ちよつとむつとしたのです。すると、おかみさんは、急に手をついて『どう

か教えてください』とおっしゃったのです。

王「何をだい」。

劉『夫にどのように訊いたらいいのか』と。

王「そうか、そなたは口がうまいからな。人が隠そうとしていることを訊くのに、あのおかみさんが、真正直に正面から尋ねても難しかろう。それで、そなたは余計な知恵を授けてしまったのか」。

劉「それだって最初は断りました。おかみさんが、あんまりぴりぴりしているの  
で、『どうぞご勝手に』みたいな気にもなっていましたから。でも、『どうか教え  
てください』と恐ろしいばかりに迫ってこられて、それに大層な剣幕で言われた  
のも何となく面白くなって、それでこっちに何の知恵もありませんというでは悔  
しい気がして、そこでふっと思い付いてしまったこともあったものですから、つ

い言ってしまったのです。いまでは言わなければよかったと後悔していますが」。王「そなただって、奇妙な笑いのわけを知ってみたい気があったのではないのかい」。

劉「それは、正直言っておりますとも。だって、人間、余計な詮索をしたくなるというのはどうすることもできない本性なのではありませんか。先生だって、知って見たくなっておられますでしょう」。

王先生は小さく笑い、

王「もちろんその通りだ。それで、どういうことをおかみさんに言ったのかい」。劉「まず符ふだを一枚出しまして、『亭主に知られないように背中に貼り付けてください。必ず本当のことを言うようになります』と」。

王先生、こんどは大笑いし、

王「嘘を言わせないまじないか。効き目があるのかい」。

劉「ありますとも。ただし、貼っただけで勝手にべらべらしゃべってくれるわけではありません。上手に訊くとお符がよく働いて、ごまかすことが決してできなくなるのです。それでおかみさんに申し上げたのは、『しんみりと先のご亭主の思いで出でも語ってみるのです、それを聞くご亭主が不快そうな顔をしたらしめたもの、そこで謝って、ごく辛そうに言うのです。』いま申したようなことだけを口にしていれば、これで私も前の人に対してよき妻であったということでもよろしいのでしようけれど、ひとり胸に秘めてきた苦しさもないわけではありませんでした。生涯誰にも言うまいと決めていたのですが、こうしてあなたさまにやさしくしていただきまして、昔を思いますと、いまはまるで夢のようです。それだけにあなたさまに隠しているのが辛くもあります。でも、申し上げたら、恩知らずだと、

あなたさまに嫌われてしまうようで、心配でなりません。そこで涙の一つもこぼしたらなおいいでしよう』と。人の秘密を訊き出すのに、自分の秘密を先に打ち明けるというのは悪くない手でございましょう。

王「そうかもしれぬ。で、おかみさんにどのような秘密があるのかい」。

劉「何だつていいのですけれど、おかみさんに申し上げたのは、『先のご亭主との間に夫婦でなければわからない何かおぞましいことがあったと、いまのご亭主が思うようなことを言つて、『どうしても我慢がならず、ずっと苦しんでいました。本当に嫌で嫌で、一生続くかと思うと、いつそ死んでしまおうかと思ったことさえありました』と、恥ずかしげにうつむくのです。さらに、『こんなことを明かしてしまった私は何という不実な女でしょう』と、さめざめと泣いてみせるのです』と」。

王「また泣くのかい」。

劉『そこでご亭主が慰めようとしたら、「こんな私など、もうお嫌いになったでしょう、私も嫌です、どうかもう捨ててしまってください」と言ってみたり、「いまのこの幸せを決して失いたくありません」と言ってみたり、ご亭主を混乱させて、そこからが肝心です、「この際、すっかり打ち明けてしまいます。先の人が川で亡くなったと聞きましたときに、実は、ほっとしたのです。ああ、とうとう言ってしまうました。空恐ろしいことです。でも、あの苦しみから解放されたと知って嬉しくてならなかったというのは、あの当時の偽りのない思いだったのです。何という性悪な女でありましょうか。それで、あなたさまとの御縁談がありましたときに、これは絶対にいけないと思いました。あなたさまの女房にしていただくような女ではないからです。ところが、親孝行ということに負けて、あなたさま



まと一緒にさせていただきますと、これほどの幸せがあるのかと夢見る心地で、それにつけても先の人への憎しみが増して、私の心根はどこまで曲がっているのだろうかとほとほと呆れまして、こんなことではいつかあなたさまに棄てられてしまふに違いないと、心配でならなくて。でも、棄てられて当然の女なのです。そんな私の心をさらに乱すことがあります、近ごろはそればかりが気になって、もう頭がおかしくなりそうです。ここで、声をたてて泣くのです。おかみさんにそのように申しました」。

王「順々に手の込んだ泣き方だな」。

劉「とかく殿方は女の涙に弱いものでございましょう。それで例の泡の一件を持ち出せば、おかみさんを安心させたくて、何か言うに違いありませんでしょう。『始めは適当な嘘でごまかそうとするかもしれないませんが、これまでの調子の続き

で、泣いたりすかりたりすれば、すべてを明かすに違いありません』と、おかみさんに申したのです」。

王「なかなかうまいことを考えるものだ」。

劉「ですが、あのとのおかみさんの様子を思い返すと、あたしの言ったことが実は当たっていたのではないかと思えて、怖くなってきました。おかみさんがすっかり訊き出して、それから先どうなるのでしょうか。先生、あたしはかなりまづかったでしょうか」。

王先生、腕組みをして、

王「私らがいま疑っているように、呂さんが先の亭主の任さんを殺したとしよう。そうなることを、朱のおかみさんは実はどこかで望んでいた。その全てが明らかになって、さてどうなるかだ」。

劉「いまからでも、訊いてはいけないと止めにいくべきでしょうか。」

王「そなたの入れ知恵があつてもなくても、おかみさんは必ず訊こうとするだろう。」

劉「でも、呂さんが潔白であればいいのでしよう。だって、決まっているわけじゃないのですから。」

王「それはまあそうだ。ここは、それを望むしかあるまいか。しかし、泡を見て気味悪く笑うというのは、ではどういふことなのだろうか。」

王先生が考え込みますと、劉婆さんも黙ってしましまして、雨音ばかりが響くようになります。

ざあつと雨脚が一段と強まって、ひたひたと水をはねて駆けてくる足音がして、こちらの路地へと入ってきます。戸が叩かれ、王先生と劉婆さんはぎくりとし、

一瞬返事をためらううちに開けられて、

「先生」。

飛び込んでまいりましたのは、ぐつしよりと濡れた当の呂さんでございます。

王先生と劉婆さんは驚いてただ目を向けておりますと、呂さんは荒い息で、

呂「ああ、劉さんもいらした。どうか、お二人で、あつしの最後の願いを、どうか聞いてやってはもらえないでしょうか」。

その場に膝をつきます。

王先生はゆっくりと立ち、開け放たれたままの戸を閉めて、

王「どうなさいましたか、何やら慌てたご様子で」。

呂さんは顔を上げ、

呂「他でもありません。あつしのところの倅、いえ、先の旦那さんの息子さんを、

どうか先生方のお力で一人前の男にしてやってください。それをどうか頼みます」。王「それでしたら、前からの頼みですから、私なりに務めております。勉強熱心なお子さんで、教えがいがあります」。

呂「あの子には何としてでも立派な大人になってもらわねば。父代わりになっていたあっしがいなくなっても」。

王「ほう、いなくなるとは。旅にでも出られるのですか」。

劉婆さんは青い顔で首をしきりに振っています。

呂「旅ではありません」。

と、言つて一度口をつぼみ、それから息をゆっくりと吐いて、

呂「よく聞いてください、あっしは、いいですが、あの子にとって、親の仇なのです。だから、あっしは、近くにいてはいけないのです。あっしは、あの子に立

派になってもらいたいと、心の底から思ってきました。それは嘘偽りのないことです。それはどうか信じてください。だから、なにとぞあの子を頼みます」。

王先生はうなずき、

王「わかりました。こう見えても、この王震屈、昔は大きな商売で、一つ返事で大金を動かしたものです。一度『うん』と言ったなら、何があるかと一歩も引くことなく、己の一言を守りました。商売人の心意気です。いまは曲がりなりにも人の道を説いて教えています。お約束して破るようなことは決してありません。息子さんのこと、必ずお引き受けいたします」。

先生、胸を叩いてみせます。

劉婆さんもそれに合わせて、

劉「あたしは、一度『うん』と言ったならと、先生のように偉そうには言えませ

ん。何しろ、口先ばかりの女でして、一言ですむはずのところを、十も二十も言  
つて、そのうちの七つか八つはあやしいところがあります。でも二つか三つの真  
実もごさいます。いま申し上げるのはそちらの二つか三つのほうで。お坊ちやま  
のこと、あたしで何の足しになるかわかりませんが、きつと面倒をみさせて  
いただきます」。

呂「ありがとうございます。これで安心しました。では」。

身を翻していこうとするのを、王先生はその腕を掴み、

王「お待ちなさい。これからどこにいかれるのか知りませんが、ことうやつて頼み  
にこられて、私どもはお引き受けしたのです、訳くらは聞かせていただこうで  
はありませんか」。

掴んだ手にぐいっと力を込めますと、

呂「いや、それは」。

と、身を固くします。

王「仇とは、確かにそなたが任さんを殺したのですな」。

王先生が一喝しますと、呂さんは力を失い、

呂「そのことを、たつたいま、女房に、いえ、先の旦那さんの奥様に申し上げたのです。こればかりは死ぬまで絶対に言ってはならないと思っていたのですが、言わずにはおけなかったのです。一人で胸の内にしてしまっておくのが苦しくて苦しくて、それでどうとう最も言っではいけない人に言っしまいました。だからこそその苦しさをわかってくれるような気がしたのです」。

劉「おかみさんは、それでどうされたのですか」。

呂「言い終えると、まともに顔を見ることができませんでした。奥様は静かに、『よ



くぞ話してくださいました。お礼を申し上げます。そして、あなたさまがしてくれたことにもお礼を申し上げます。あなたさまがそうしてくれたからこそ、いまこうして幸せに暮らしていられるのです。そう言われました。

劉「でしたら、どこにもいかれることもないではありませんか」。

呂「いえ、自分の罪深さを改めて思い知るよりなかつたのです。その上、奥様はこうも言われました。『いまのこの幸せをずっと昔から私は望んでいたのです。ということとは、私が殺したも同然なのです』。あつしはそれを聞いて、背筋が凍ったように冷たく感じられたのです」。

呂さんは顔を歪めます。

王「嫌なことを訊くようだが、おかみさんとは昔、何かあつたのかい」。

呂「いえ、何もありません。ただ、隠さず申せば、あつしが心の内で思っていた

ことはあります。旦那さんよりも、あつしのほうが若くて年頃も合うのではないかと。たわいもないことを勝手に思っていました。それだけだったのです。ただ、あの旅に出たあの朝に、お見送りに立っておられた奥様の目が、何か言いたげにあつしに向けられていると、なぜかそんなふうに思ってしまったのです」。

王「それで大それたことをしてしまったのですか」。

呂「企んだのではなく、ほんのはずみです。あの晩、突然、船がひっくり返って、皆が水中に投げ出されました。あつしはもともと泳ぎが得意で、旦那さんの腕を取って、いい塩梅に掴まるものもありましたので、川岸へと近づいていこうと思いました。そのとき、あの朝のおかみさんの目を思い出したのです。すると、あつしと思う間もなしに、あつしの手は旦那さんの腕を放していたのです。放そうと思って放したのではないのです。手の内から旦那さんの腕がなくなったことに気づ

くと、あつしは思いました。旦那さんはろくに泳げませんし、胴巻きには重い錢を括り付けていましたから、きつと水に沈んでしまうと。そしたら、急に嬉しくなつてきまして、飛び跳ねたいばかりで。そしてすぐにぞつとしたのです。これはいけないと、旦那さんの腕を探りました。もう掴めはしません。ほつとするのと後悔するのと、わけのわからない滅茶苦茶な心持ちでした。とにかく旦那さんの行方を見定めようと、水面からぐいと首を突き出しました。そのときの光景は忘れようとしても忘れられるものではありません。その夜は、細い月が昇つてきたばかりで、強い風で雲が流れるなかに淡い光があっただけのはずなのに、真昼のように川の流れがくつきりと見えたのです。一面が真白く泡立っていました。細かい泡が浮かんで消え浮かんで消え、何ともいいようのない異様なありさままで、ぞつと総毛立ちました。すると、川下にぽつと旦那さんの頭が浮かび出ま

した。あつしは驚きました。どうしてだ、沈んでくれていればよかったのにとあつしは思いました。自分の心根の悪さに全身が寒くなりました。旦那さんはあつしを見つけてぎろりと睨みました。恐怖に体が竦みました。『おまえのしたことはこの泡が全部知っている』。旦那さんがそう言ったのです。

王「任さんの声が聞こえたのかい」。

呂「へえ。遙か遠くなのに、川が音を立てて流れているのに、腹の底にぐさりと突き刺さるような声ははっきりと聞こえました。声が終わると、川一面の泡が大きく激しく湧き立ちまして、そのなかに旦那さんは消えて、もう二度とは見えませんでした。あつしは無我夢中で水から早く出ようと思いました。水底に足を引き込まれるような感じがして、もう必死でした。岸边までの距離がとてつもなく長く感じられて、やっこのことで泳ぎ着きますと、白々と明けていく川辺にしゃが

み込んだまま、ずっと動けずにいたのです。

王「なるほど、そういうことがあったから、雨上がりの水溜りを見て、気味悪く笑っていたのですな」。

呂さんはぎよっとして、

呂「先生はどうしてそれを。いや、悪い事は決して隠しおおせないものなのでしよう。自分だけは隠せていると思っけていても、人は知ってしまったているのです。

あつしは、『泡が全部知っている』と言った旦那を嘲り笑ったのです。あの事故があつてからずっと泡を見ないようにしていました。泡を見ればどうしたて思い出しますから。あつしが思い出しさえしなければ、あつたことも消えてしまうのではないかとの思いがあつて。そうこうするうちに五年も経ちますと、あつしもあのことはなかつたような気になつてきていました。あるとき、どうしてだつた

のでしょうか、ふと気づくと、あつしは水溜りの横に立っていて、ふつふつと湧き出してきている泡を見つめていました。はっとして、冷や汗が流れました。でも、すぐに思い返したのです。だから何なのだと。雨が上がって、水溜りに泡ができています、ただそれだけではないか。顔を上げると、日ざしがまぶしく輝いていました。怖がっている自分が可笑しく思えました。泡は何事もなく消えていきました。それから、水溜りができるたびに、吸い寄せられるようにして見入っていました。『泡が全部知っている』。旦那さんの声が聞こえてきまして、あつしが『それがどうだというのだ』と言い返しますと、旦那さんの悔しそうな顔が浮かんできまして、でもすぐに一瞬の後には泡のなかへと消えてしまふのです。あつしはそれが嬉しくてならず、思わず笑ってしまうのです。しかし、水溜りから離れますと、笑った自分が何ともおぞましくて、苦しくてたまら

なくなるのです。だからなのでしょう、水溜りができると、また見たくなってしまうのです」。

呂さんは深く嘆息します。

外がにわか騒がしくなり、叫び合いながら人々が路地の内へと入ってきます。

「ここです。ここです。ここに駆け入ったのを見たのです」。

「どこにいる。逃げても無駄だ。おとなしくさっさと出ていけ」。

「お上の御用であるぞ」。

呂さんはがばと立ち、

呂「あつしです。主殺しのあつしを掴まえにきたのです」。

劉「どうしてお役人が」。

王「おかみさんだ」。

呂さんは戸を開けつつ、

呂「あつしは主殺しの罪で斬られます。どうか、息子さんのことを頼みます」。

雨中に飛び出し、お役人の前に腕を差し出します。

**そ**れからひと月あまりのよく晴れた午後。

子どもたちが勉強を終えて帰っていきますと、以前なら王先生は一人だけで他にすることもなく書見でもということになるのですが、いまは男の子が一人いて、小机を拭くなど後片付けをしております。任さんの息子の任敏之じんびんしでございます。

「先生、おられますか」。

ぬっと入って参りましたのは、いつも通りの劉婆さん。夏の盛りでございます



から、戸は開け放しです。

劉「もう七夕でございましょう、馬行街ばこうがいに出た折に、磨喝樂まほろのお人形を買ってきました。あたしが買ってくるのですから、自慢できるような品ではなくて、ごくごく安い泥人形なのですが」。

高さが五寸ばかりの童子の人形を差し出します。

王「そうか、もう乞巧節きっこうせつであったか。だったら馬行街は賑わっていただろう。ほう、これは昔ながらの男の子だ。近頃では、磨喝樂にもきれいに彩色した女の子があつて、一対にして並べるのが流行っているそうではないか」。

劉「それが商売だつていうのです。人形が二つ売れますもの。あたしはそんな手には乗せられません。世の中の人は、何でもごちや混ぜにしまつたのが好きなのではないかねえ。だって、磨喝樂と、牛郎、織女とはまったく別物なのに、

磨喝楽を男女一對に並べて良縁を願うというのですから、おかしいではありませんか。

王「そうそう、磨喝楽は、もともとは摩睺羅まごうらという仏様の守護神だ。六万年だかの修行をして出家成仏したのにあやかろうというのならわかるが、いくら何でも縁結びは関係ないだろうに」。

劉「あたしはちゃんとそのへんのことをわきまえておりますから、ほら、蓮の葉を採ってきました。磨喝楽にお供えしてくださいな。あの子が不憫でならなくて、せめて乞巧節の真似事くらいはしてやりたいのです」。

女の子は織女に、男の子は牛郎に、それぞれ技が巧みになりますようにと祈るが乞巧節でありまして、いつしかそこに祈る対象として磨喝楽も加わってきたのでございます。

王「そうかい、気を遣ってくれてありがたい」。

劉「先生だけに任せておくわけにはいきませんから。あたしだって、ちゃんと面倒みますと約束したのです」。

王先生が任敏之を呼びますと、任敏之がごく丁寧に礼を言います。

劉「本当に賢い子ですこと。磨喝楽の人形に祈るまでもなく、学問成就はきつと間違いありません」。

任「蓮の葉でしたら、水に浮かべるとよろしいかと思えます。それに、蓮の葉に溜まった水で墨をすって書くと、上手な詩が作れるようになりますと聞きます。水を汲んでまいりましょう」。

王「あのたらいいだろう」。

劉「水でしたらあたしが汲んできましょう」。

任「いえ、ぼくがいつてきます」。

任敏之はたらいを抱えて外に出ていきます。

劉「よく気の付く子です。本当に感心します」。

王「急いで出ていったらう。たぶん、一人になって、水場で泣くのだらう。去年の七夕を思い出したりしてな」。

劉「あれからまだひと月あまり。よく耐えていますよ」。

劉婆さんはそつと涙を拭きます。

王「それにしても、おかみさんは思い切ったことをしたものだ」。

劉「あの子は、それを見ていたのでしよう」。

王「たぶん。はかりしれない痛みを心に受けたに違いない。一度『うん』と言ったなら一歩も引かぬと大きなことを言った手前、あの子は何としてでも立派な大

人にしてやらねばならない。これまでは、飯を食うために読み書きでも教えておくかといった程度の融通教師であったが、あの子がここにきてからは、私も真剣に学問というものを考えるようになった。学問があの子を強くしてくれると信じるしかあるまいと思っている。粗末なこの泥人形ではあるが、心の底から祈れば叶うであろう」。

王先生と劉婆さんは磨喝楽の人形を檀の上に飾り、祈りを捧げます。

あの日、呂さんが役人に連れていかれますと、王先生と劉婆さんは、強く降る雨のなかを走って呂さんの店にいきました。店の入口に、任敏之が呆然と立ち竦んでいました。なかに入ると、庭の水溜りの横、呂さんが泡を見て笑っていたのであろうあたりで、朱のおかみさんは喉を掻き切って倒れていました。その腕の内に息絶えた小さな娘の体があったのでございます。

宋のおかみさんがどうして死ななければならなかったのか、王先生と劉婆さんはそれぞれ心に思うことはあっても、話をしたことはありません。残された任敏之に何をしたらいいのかということに二人は心を砕いているのでございます。

というわけで、王先生が登場する物語は、任敏之を引き取る前と後とで二つに分かれることになるのでございますが、宋という国の命運も、この時期を境として大きく分かれていくのであります。それについてはまたおいおいお話しさせていただくことといたします。